

# 羽ばたけ! こどもたち

大堀 寛人

③

に下調べをします。調べた情報を遊ぶ前に、こどもたちに伝えることで、リスクはぐんと減るのです。

例えば、山に行つて草の斜面を登るときには、「草を引っ張ると手が切れるよ」「ぐらぐらしている石は、踏むと転ぶかもしれないよ」など。それでも手

のです。

小さなけがの経験は将来、危険を回避する知恵につながります。「危ないから…」といつて経験を避けていては、その子が本当に危険に直面したとき、臨機応変に対応できず、被害を拡大させることもあり得るのです。

ています。

広島市植物公園(佐伯区)で水生植物のオオオニバスを見ると「この葉っぱは、三十キの物を載せても沈まないんだよ。みんななら二人ぐらい乗れるかな」などと話します。帰りのバスで先生が話した内容をこどもたちに質問、正解したら「聞いててくれてうれしいな」と褒めます。すると、聞いていなかったこどもは、次から先生のそばでしっかり聞こうとします。こどもに危険を知らせても、聞いてくれなければ、知らせたことにはならないのです。

山登りや川遊びなど、幼児の野外活動を「危険」と考える人もいると思えます。しかし、そんなことはありません。私たち指導者は、遊び場を決める際、そこが遊び場として耐えうるのか、けがをしそうな場所はどこにあるかなど、事前

## 危険回避のために

## ルールの大切さを教える

大人の「手  
のひら」から  
こぼれない範

るため、とても大事です。その前提として、人の話を聞けるこどもを育てることも重要なポイントになります。私たちは普段から、こどもたちが興味を引く話題を提供できるよう心掛け

囲で、こどもたちに五感を働かせて学ぶチャンスを与えることこそ危険回避への実践と考えるのです。

(ふれいすくーる・ちゅーりっぷⅡ広島市西区Ⅱ園長)



「わー、楽しい!」。安佐南区の広島広域公園で草の斜面を滑って遊ぶ2歳児たち(園提供)